

教 仁 名 聞

第29号

(発行日)

2013年2月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

和泉式部と小式部

ていくなら、あなたのお母さんはあなた(他)に真実へとすすめたもう働き(利)をなして下さっているといえます。それで利他の働きをして下さるお方ですから、亡き人を佛と拝むことが出来るのです」

N「それで、亡くなった母は私にとっては何様なのですかね」

D「ええそうです。長くなりませんが和泉式部のお話をしましょう。和泉式部は十世紀から十一世紀の頃、宮中に仕えた歌人ですが、彼女に小式部内持という愛する娘がいました。彼女は二十六才の若さで親に先立って亡くなったのですが、亡くなる前に母の和泉式部に

いかにせん 行くべき方もおぼえずに 親に先立つ道を残らねば

という歌を残して逝きました。和泉式部は娘の死と娘に安心して死んでいける道を教えることが出来なかつたことを悲しみ、それ以後佛法を求め、精進し、晩年には平安を得たと言われています。そして最後に

夢の世に 仇にはかなき 身を知れと 教えてかへる 子は知識なり という有名な歌を残して亡くなりました。

彼女にとっては先だった娘の小式部は自分に佛法を求めさせた善知識である、いわば佛のお導きのすがたであったと娘を拜んでいるのです」

N「なるほど、亡くなられた方は生きていた私たちを真実に目覚ましめる働きをして下さるといふ意味で佛様なのですね」

D「ええそうです。そしてその元は、真実の働きは普遍的なもの、いかなる事象にも作用的に働いているからそう言えるのでありましょう」

N「ただ、今までのことは亡くなった人その人自身のことではなくて、残された人(遺族)におけることですが、亡くなる本人は(自分は死んだらどうなるのであろうか)という問題が残されていますね。小式部が(いかにせん)行くべき方も おぼえずに)と詠っているように、(私は死んでいく先が分からない)という惑いを抱えて死んでいったように」

N「先日、母が亡くなりましたが、その時お手次ぎのお寺の住職さんが、母は佛様になられました、といわれたのですが、それは本当でしょうか」

D「お母さんは仏教を厚く信じておられたのですか」

N「いいえ、仏教には関心が無く、お寺に参って仏教の話聞いたことがない、全くの無信心の人でした。ですから死んで本当に佛になったのかという戸惑いがあります」

D「その住職さんのいわれる真意は私にはうかがい知れませんが、あなたにとって亡くなられたお母さんが佛様であるといわれるのは、偽りではありません」

N「なぜですか」

D「亡くなられた方はご遺族にとつては佛としての利他の働きをして下さるからです」

N「利他とは」

D「(他を利する)、他とはここではあなたのことです。あなたを真実に導き入れて真実に目覚めしめていく働きをい

うのです」

N「では亡くなった母はそういう利他の働きをしているということですか」

D「ええ、あなたがお母さんの死を通して利他の功德をいただくことが出来るからです」

N「それは具体的にどういう事ですか」

D「親しい人が亡くなっていくすがたは、生きていた私たちに人生は無常であることを知らせ、この世の財や名誉や地位などにかまけるのではなくて、真実を求め、阿弥陀仏を抛り処として生きてくれよ助かってくれよとのご催促だからです」

N「近親者の死は、私たちの人生が無常であり、この世の物は何一つタヨリにならないから、真実変わらないことを求めてくれよと身をもってしめしてくださいっているのですね」

D「ええ、その様にお母さんの死を通してあなたが目覚め

木村無相さんの法信 9

(昭和五十七年六月十二日付)

けの木村無相さんから私への
お手紙)

知らずぎにし

ことのくやしき

とあるが、59頁に

御声が親様である。

活いきほとけ 仏はこれじゃ。

とあるが、同時に

御声が白道である。

カバタの和上さまが、『求法
用心集』(49ページ)に

○聲こえが白道

聲が白道なり。

聲のかからぬ処へは行け

ぬ。

今度はお聲が白道となるな

『阿弥陀経和讃』の最後に
五濁悪時悪世界

濁悪邪見の衆生には

弥陀の名号あたえてぞ

恒沙ごうじやの諸仏すめたり

とあるが、「濁悪邪見のオタガ

イ」にステに、お念佛は、白道

としてのお念佛は、与えられて

いるのである。今さらに、三定

死がどうのこうの、道、前方に

あり、どころではない。

「道」は「白道」はステに三

定死の身にステに与えられてい

るのである。

ただソノコトに、その事実に

気づかない。アタマでわかるよ

うであっても、「ああ、そうか」

といただかれぬから、

恒沙ごうじやの諸仏が、そのお念佛の

ホカほかに白道はないぞよ。そのお

佛をば

N 「信心がなければさうい

うお話を聞いても本当には受け

入れていないのですね」

D 「ええ、実は心の中では疑

っているのです。ですからた

とえば外の人が「それは間違

いだ」と言うとなぐらつ

きます」

N 「弥陀の本願への信心がな

ければ気休めの域をでないの

で、すぐにぐらつのですね」

D 「ええ、「死んだら仏にす

る、浄土に帰らせる」との弥

陀の本願を信じる時、阿弥陀

仏の大悲の心が私の心に届い

て離れなくなりませす。その大

悲の心が信心となつて下さる

から「死んだら仏になる」とこ

とが疑われなくなるのです」

N 「そうすると、「死んだら

仏にする」という仏のお言葉

を信じる信心が大事です」

D 「ええさうなんです。信心

がなければ、たとえ仏になる

のだ、浄土に帰るのだと言わ

れても、心の中に疑いがあり

ますから、本当は信じていな

い。気休めにしかなっていない

のです」

N 「気休めしかなくていない

とまことの喜びも安心もな

く、未来は暗いままですね」

D 「ええさうです」(了)

慰めのお話のようにしか思え

ず、死んだらどうなるか、ま

ったく五里霧中です」

D 「実は「死んだら仏になる、

浄土に帰る」などという言葉

は、人が人に対して言える言

葉でもなければ、言う言葉で

はないでしょう。あえていう

ならそれは、阿弥陀仏の仰せ

であります。阿弥陀仏が私た

ち一人一人に向かって「我が

仏にする」(浄土へ連れてい

く)との誓いのお言葉です」

N 「阿弥陀仏のお言葉といた

だけのすね」

D 「ええ、ですから人が人に

向かって、死んだらみな佛だ

とか、死んだらみな浄土に帰

るなどというお話は誤解さ

れやすいです。死にさえず

れば仏になる、浄土に帰ると

聞いて、これでよいと、そこ

に腰を下ろしてしまつて、自

分の信心を問わなくなるから

です」

N 「確かな信心がなければな

ぜいけないのですか」

D 「たとえ、死んだら浄土に

帰るのだと聞いても、それは

単なるお話か気休めとしか思

えず、浄土に生まれる喜びも

助けられた安心もなく、浄土

に生まれることが確かである

とも感じられません」

D 「ええさうです。亡くなる

本人の問題があるので。本

人に、私は死んで佛にならせ

ていただくという確かな信心

がなければ、お先は真つ暗と

いつていいですね」

N 「ええ、死んでいった人で

なくて、この死んでいく私は

死んだらどうなるのか、とい

う切実な問題です」

D 「それが一番大事です。他

者の死の問題ではなくて、

この私の死んでいく問題です

ね」

N 「死んでいった人は佛の働

きをしてくれて、「お前は死

んだらどこへいくのか、それ

を問題とせよ」と身をもって

教えて下さつたといえます

ね。ですから、結局は私の死

の問題になつてきます」

D 「今あなたは死んで行く道

がついていないのですね」

N 「ええ、死んだら佛になる

ということとはとても分からな

いし、信ぜられないし、不安

です」

D 「それを後生の一大事とい

いまして、この問題は人ごと

にはできません」

N 「ときどき「死んだら佛に

なるんですよ」とか「死んだ

ら浄土に生まれるんですよ」

と聞きますが、それは単なる

念佛一つだよ。オタガイの生死
出離の道は、白道はと

「恒沙の諸仏すすめける」
で、お勧めにすすめて下さって
いるのである。

釈迦如来、善導、法然、親鸞、
香樹院ホカ諸仏が、その念仏が
白道であるぞよ、唯一の往生極
楽の道であるぞよ、それよりホ
カに出離の道はないぞよ、と、
阿弥陀経では東西南北上下の六
方の無尽の諸仏が、念仏往生を
讃嘆し、おすすめに成り、証明
下さっているのです。七高僧が。

今どきの先生方が、念仏往生
を軽く思っているもいいではな
いか。

釈迦、弥陀七高僧等の証言、
証明さえあれば、

ただ念仏して、よき人の仰せ
のままに、お念仏一つといただ
くホカはないのである。

それも今さら称えるの信ずる
のというようなことではなく、
今スデに、この口に、声として、
与えられている、お念仏であり、
お称名であり、ナムアマミダブツ
であり、このホカに別に、今さ
ら踏み込むべき白道などという
ものはないのである。

○ 我れ称え

我れ聞くなれど

ナムアマミダ

連れてゆくぞの

親の呼び声

とは、原口針水師のお歌とのこ
とであるが、ワレワレが今、口
に称えるお念仏は

連れてゆくぞ

の親の呼び声である。念仏しつ
つ、ソレを聞く以外に、信心も
安心もない。

○

ただ念仏しつつ、念仏の仰せ、
「連れてゆくぞ」を聞くホカに
信心も安心もない。

○

「汝一心正念にしてただち
に來たれ」

の仰せも、今現に、称えられる
お念仏の仰せであって、遠く西
岸上にあつて、遠くから呼んで
いる声ではない。白道というも
今の称えるナムアマミダブツ、親
様というも今称えるナムアマミダ
ブツ、「往け」も「来い」も、
今称えるナムアマミダブツの中
にある。

「往く」も「踏み込む」も、

今現に称えつつあるお念仏のホ
カにはない。『二河』というも、
この我々の、どうしようもない、
心のホカにはない。『白道』と
いうも、この『二河』の煩惱身、
煩惱心とはなれておくれぬ今の
お念仏のホカにはない。

聞法というも、今称えるお念

仏の仰せを、お念仏において、
声において、口において、聞く
ホカはない。

○

ただ念仏はそのまま、ミダの
お助けなのである、白道なので
ある。それだから

ただ念仏せよ、

ただ念仏において、ミダに助
けられよ

○

と「よき人」が仰せられるので
ある。

○

イワユル、学者たちの、未信
の人の言にとらわれていては、
百千年かかっても助かる時は
ない。

○

現代の先生がた、教団人の言
うことがどうであつてもかまわ
ないでないか。

如来、釈迦、七高僧、聖人、

香師、その他の諸仏の確信ある
おすすめ、仰せさえあればいい
ではないか。それで私は、如来、
聖人様のオカゲで現代の学者先
生がたのいったり、書いたりす
ることに迷うことはやめて、「聖
人お一人の仰せ」と決定させ
て、

ただ念仏して、ミダに助けら
れまいらすべし

との「よき人」の仰せ、その意
味の「就人立信」、ただ念仏と

いう「就行立信」に決定させ
られたのです。

○

紀さんー

聖人の晩年の御著書とお手紙
をくりかえしくりかえし拝読し
て、聖人直接に、「弥陀の本願」
は「念仏往生」、その現実は、
仰せのままに「ただ念仏のみ」
とはいただかれませんか。

今、現に、信、不信のかかわ
らずお念仏申さるる、このお念
仏のホカに、オタガイの生死出
離の道はないのです。ワレワレ
が、今さら、信ずるの自覚する
のと言うまでもなく、

スデに、
弥陀、釈迦が、善導、法然、親
鸞が御証明、御証言であります。
ただ念仏してミダに助けられよ
と。

助けるとは、我々の力や分別
ではどうしようも無い、出離生
死についての一切をマルマル引
き受けて下さるる、というお念
仏の仰せのままに、ナムアマミダ
ブツと如来の誓願を、おいただ
きするホカに、助かるというこ
とはないのです。

又、アリノママの手紙を下さ
い。紀さんは、アリノママ、書
いてくれるので、よくわかって
ありがたいです。もうとても会
えそうもないから、文通のホカ

ありません。ソレも、私の目が
どうにか見える間で。

ナムアマミダブツ ナムアマミダ
ブツ

これが結論であり、一切であり
ます。(続く)

《任職雑感》

韓国ドラマを時々見る。時代物もいろ
いろあり、面白い。そうしたドラマの
中で時々仏教僧が登場してくる。ドラ
マで仏教僧がどう描かれているかは、
現代の韓国の人たちが仏教僧をどう
見、どう感じているのかが、ドラマを
通して伝わってくる。まず仏教僧に対
して敬いの念を少なからずもっている
ことがひしひしと伝わる。またドラマ
の脚本家が仏教を結構理解しているこ
とが、ドラマの中での仏教僧の発言か
らも伺える。韓国は今やキリスト教国
として見られるほどキリスト教が盛ん
であるが、どっこい仏教が結構生きて
いることが感じられて嬉しい。宗教史
も盛衰の歴史であるが、今後また韓国
で仏教がより盛んになることも十分あ
り得ると思う。日本はどうであろうか。
しばらくは今のような状態が続くと思
われる。仏教が盛んになる気配が現在
は見当たらない。問題はいかに衰退し
ても、この私がこんな日本の状態の中
で仏教にであったことを有難く思い、
大事にしたい。

正信偈に学ぶ同答

(五十)

矜哀定散与逆悪 光明名号顕因縁

(書き下し) 定散と逆悪を矜哀して、光明名号、因縁を顕す。

(現代語訳) 善導大師は善悪のすべての人を哀れんで、光明と名号が縁となり因となってお救い下さると示された。

N 「次の〈光明名号、因縁を顕す〉のところをお話し下さい」

D 「この箇所は善導大師が観無量寿経を註釈され、善悪のすべての人を哀れんで、光明と名号が縁となり因となってお救い下さる弥陀の本願の救いを明らかにされた」と、聖人は仰せ下さるのです」

N 「定散というのは」

D 「善導大師は仏法の救いの対象の人(機)を定善の機と散善の機に分けられました。定善の機とは、禪定をして心を静め、心を安定させて如来浄土を観想する修行、それによって浄土に生まれようとする機類のことです。散善の機とは心は散りながら諸善を行うことよって浄土に生まれようとする機類のことです。そして散善の機類は九種類に分けて説

かれていま

N 「散善にはどんな善があるのですか」

D 「たとえば、戒律を守ったり、大乘經典を読んだり、あるいは因果を深く信じて身を慎んだり、父母に孝行したりするような善行です。あるいは称名念仏を称えたりすることです。心は乱れ散りながらもそういう行によつて浄土に生まれようとする人のことを散善の機といえます」

N 「では逆悪とは」

D 「散善の九種機類の中で下品といわれる下の三種の機は生涯一つも善を為さず悪ばかりしてきたが、臨終間際になつて善知識にあつて阿弥陀仏の功德を聞き、称名念仏を称えて浄土に生まれることができたという、その人たちのことをとくに逆悪とここでは仰せられています」

N 「逆悪の人も散善の機といわれるのはなぜですか」

D 「それは一生悪ばかりを重ねてきた人が臨終間際に善知識から阿弥陀仏のお助けを聞いてお念仏を申したので、そういう人たちも阿弥陀仏の功德を聞き念仏を申すという善を行った人なので散善の機とされるのです。その人自身の性質は十悪五逆を行つてきた悪人です」

N 「定散の人たちの中で、ことに逆

悪を為してきたような人を取り上げてあるのはなぜですか」

D 「それは弥陀の本願は、善人よりも悪人に焦点を当てて、これらを矜哀し、それによつて一切衆生を救おうとされたのです。どんな人も救いの対象でない者はありませんが、ことに逆悪の人たちを助けずにはおかぬと憐れんで下さり、それによつて阿弥陀仏は善悪の凡夫人の全てを救おうされるのです」

N 「矜哀とは」

D 「矜哀とは阿弥陀仏が、大悲もてあわれみたまふことです」

N 「逆悪とは」

D 「五逆十悪のことです」

N 「十悪とは」

D 「殺生・偷盗・邪淫・妄語・綺語・悪口・両舌・貪欲・瞋恚・愚癡です」

N 「綺語とは」

D 「無意味なおしゃべり」

N 「悪口とは」

D 「ののしつたり侮蔑したりする粗悪な言葉」

N 「両舌とは」

D 「仲違いをさせる言葉」

N 「愚癡とは」

D 「自己中心的な考えのこと」

N 「五逆とは」

D 「父を殺し、母を害し、仏身より血を出だし、和合僧を破し、阿羅漢を殺す、とか因果を信ぜず、日夜に十悪を行ずる、などの重罪のことです」

N 「仏身より血を出だすとは」

D 「仏様に反逆し傷つけることです」

N 「和合僧を破すとは」

D 「仏教徒の和やかな集まりを分裂させ対立させることです」

N 「阿羅漢とは」

D 「悟りを開き煩惱を除いた人です」

N 「因果を信ぜずとは」

D 「善をなすと安樂を結果し、悪を為すと苦しみを結果することを信じないことです」

N 「こうした十悪五逆というような悪を為したり、縁あればそれらをつつでも為しかねず、純粹な善は一つも為せないような悪人がことに矜哀されているとのことですね」

D 「ええ、そこで大事なことはそうした十悪五逆の罪人とはだれかという、ほかならぬ私自身であったと、観無量寿経などの浄土の教えを聞くことによつて私たちは自分が逆悪の機であることを知らされるのです」

N 「そんな逆悪の私を矜哀して下さい

D 「ええそうです。少し詳しく言いますと、定善と散善の機も自分の為す定善や散善によつては浄土への往生は不可能であり、我が身は救われ難き逆悪の機と知らされて、共にただ阿弥陀仏の願力によつてのみ助けられるのであること、そのことを善導大師は教えて下さったと、聖人は讚嘆されているのです」 (了)